第１回養成講座を終えて
～「学びの覚書」を読んで、主催者の振り返りと気づき～

第１回の養成講座では、講座終了後に参加者の皆さんに「学びの覚書」として、講座を通して感じたことや学んだことを書いていただきました。

その内容を読ませていただくと、今回の講座で得られた学びの一つとして、子どもの成長や発達を段階的に捉えながら、その背景にある状況を論理的かつ多面的に理解する視点が挙げられていました。

特に、BPS モデル（生物・心理・社会の視点）や脆弱性ストレスモデル、エリクソンの発達段階などを学ぶことで、不登校という一つの現象だけを見るのではなく、子どもの成長過程や心理状態、家庭環境、学校や社会との関係など、さまざまな側面から子どもの内面を理解することの大切さを実感されたようです。

こうした多面的な視点を支援者自身が身につけることによって、目の前に現れている「不登校」という状態だけに目を向けるのではなく、「この子は今、何を感じ、何に困り、何を求めているのだろう」と考えながら、その子どもにとってより適切な支援を考えることにつながります。

また、「なぜ不登校になったのか」という原因を一つに特定することよりも、子どもや家族の話に丁寧に耳を傾け、そこから多様な要因や背景を理解していくことこそが、支援の基本であるという気づきもありました。

不登校には、一つの原因では説明できない複合的な背景があります。だからこそ、支援者が最初から答えを求めるのではなく、子どもや家族の言葉を聴き、その人自身の経験や思いを理解することから支援を始めることの重要性を学ぶ機会となりました。

さらに、グループワークでは、同じ講座を受講していても参加者によって異なる視点や考え方があることを知ることができ、「他の参加者の意見がとても参考になった」「話し合うことで新鮮な気づきが得られた」といった感想も寄せられました。

専門的な知識を一方的に学ぶだけではなく、参加者同士がそれぞれの経験や考えを持ち寄り、対話することで、自分一人では気づかなかった視点を得ることができます。

第１回の講座を通して、参加者の皆さんが、「不登校を理解すること」から

「その子どもを理解すること」へと視点を広げることができたことは、大きな学びの一つになったのではないかと思います。

今回の第１回養成講座で特に価値があると感じたのは、単に不登校に関する知識が増えたことだけではありません。
一人ひとりの「見る視点」が少しずつ変わり始めていることこそ、大きな学びだったのではないかと思います。

不登校という「状態」を理解する。
↓
その背景を一つの原因だけで捉えず、多面的に見る。
↓
一人ひとり異なる子どもの内面や思いを理解する。
↓
「学校に行くこと」だけを目標にするのではなく、その子どもの「今」に寄り添う。
↓
そして、子どもを中心に考えた訪問型伴走支援につなげていく。

この一連の流れが、今回の養成講座が大切にしている「支援の思想」の一つとして見えてきたように感じています。

そして、この「見る視点」は第２回以降の講座へとつながっていきます。
第１回では「不登校を理解し、見る視点」を学びました。
第２回では、そこから実際の支援につなげるための「基礎」を学びます。
第３回では、子どもだけではなく「家族を理解する視点」へと広げていきます。

その後も、早期支援、多機関連携、社会資源の活用、そして訪問看護による支援の振り返りへと学びを深めていきます。

そう考えると、全６回の養成講座は、単に知識を順番に学んでいく講座ではありません。
「支援者として、どのように見るのか、どのように考えるのか、そしてどのように子どもや家族と関わるのか」

その支援者自身の視点を、６回を通して育てていく講座なのだと思います。
だからこそ、皆さんが書いてくださった「学びの覚書」は、とても大切な意味を持っています。

そこには、講師から教えてもらった知識だけではなく、
「自分は何に気づいたのか」
「これまでの支援の見方がどう変わったのか」
「これからの実践で何を大切にしたいのか」
という、一人ひとりの支援者としての気づきが記されています。

これらを第１回から第６回まで積み重ねていくことで、私たちは、この講座で何を学んだのかだけではなく、支援者の視点がどのように変化していったのかを振り返ることができます。

そして、その積み重ねは、今回の養成講座から生まれる「不登校支援ガイドブック」をつくるうえでも、大切な素材になります。

目指したいのは、講師が知識を整理して教えるだけの「講座のテキスト」ではありません。
専門家の知見と、実際に支援を担う実践者の気づきや経験が重なり合い、ともにつくり上げていくガイドブックです。

それは、宮崎で実践している訪問型伴走支援の知恵を、一つの形として体系化した「実践書」になっていくのではないかと思います。

これは、これまで宮崎もやいの会のミッションであり大切にしてきた、「既存の制度に人を当てはめるのではなく、制度の狭間にいる人のところへ支援を届ける」という姿勢ともつながっています。

不登校支援においても、制度や既存の支援につながることを待つだけではなく、支援を必要としている子どもや家族のところへ、こちらから出向いていく。
そのためには、支援の方法だけではなく、「その人をどう見るのか」という支援者自身の視点が問われます。

だからこそ、皆さんの「学びの覚書」には大きな意味があります。
一人ひとりの小さな気づきが集まり、実践となり、それがまた新しい気づきを生み出していく。

私たちがつくろうとしているガイドブックも、完成したところが終着点ではありません。

実践→ 振り返り→ 体系化→ ガイドブック→ 新たな実践→ さらに振り返る→ 改訂する

この循環を繰り返すことで、ガイドブックそのものも成長していくのだと思います。

今回の「学びの覚書」は、その最初の一歩です。
これから第２回、第３回と学びを重ねる中で、皆さんの「見る視点」「考える視点」「支援する視点」がどのように変化していくのか。

主催者として、その変化を皆さんと一緒に見つめていきたいと思います。
そして最終的には、講師だけがつくったものではなく、参加した皆さん一人ひとりの学びと実践が息づいた、宮崎から発信する不登校支援のガイドブックを、ともにつくっていければと思っています。

今回、積極的に参加して頂いた訪問看護ステーションを紹介します。
県北は延岡市、県西は小林市など県内各地からの参加でした。

#訪問看護ステーション CURA 都城（都城市）
#訪問看護ステーション虹 Life（小林市）
#訪問看護ステーション翼（綾町）
#訪問看護ステーションライド（都城市）
#訪問看護ステーション紬（都農町）
#訪問看護ステーションはまゆり（延岡市）
#訪問看護ステーションラ.ポール（宮崎市）
#SOU 訪問看護ステーション宮崎（宮崎市）
#訪問看護ステーションオリーブ（宮崎市）
#訪問看護ステーション Calm 日向（日向市）
#訪問看護ステーションコルディアーレ宮崎（宮崎市）
#ユーカリ訪問看護ステーション miyazaki（宮崎市）
#訪問看護ステーションぱりおん（宮崎市）
#訪問看護ステーションベスト（宮崎市）
#訪問看護ステーションかえるのほっぺ（宮崎市）

学びを 実践知 へ。

宮崎から新しい不登校支援をつくる。

子どもと家族の
「今」に寄り添い
ともに歩む支援を
宮崎から

不登校という
状態を理解する

→

その背景を
多面的に捉える

→

一人ひとりの
子どもの内面を
理解する

→

その子どもの
「今」に寄り添う

→

子どもを中心にした
訪問型伴走支援
につなげる



参加者の
「学びの覚書」が
未来の支援をつくる
大切な素材です

学びの覚書

- 何を学んだか
- 何に気づいたか
- 支援の見方が
  どう変わったか
- これから大切に
  したいこと

講師と参加者がともにつくる 不登校支援ガイドブック

現場の経験
×
専門家の知見
＝
宮崎から発信する
実践書

子どもと家族が
自分らしく生きられる
地域をめざして





制度の狭間にいる
人のところへ
支援を届ける



既存の制度に人を当てはめるのではなく
必要なところへ、こちらから出向いていく。
それが私たちの支援の姿勢です。

NPO法人 宮崎もやいの会

すべての子どもが安心して過ごせる地域の未来へ